

“The Rich Boy” 試論

馬 場 雅 典

序

“The Rich Boy”は *The Great Gatsby* の出版後1925年の4月から8月にかけて執筆され、翌1926年の1, 2月号に分けて雑誌 *Red Book* に掲載され、後に短編集 *All the Sad Young Men* に入れられた作品である。^①この作品において主人公の金持の青年 Anson Hunter は Paula Legendre との恋愛, Dolly Karger との恋愛遊戯, 叔母 Edna の浮気処理といった経験をしていく間に生の感覚が希薄になってゆき、最後には神経衰弱に陥いる。^②それらの経験で、どのようなアンソン特有の心の動きをすることで、彼の生の感覚が希薄になり神経衰弱に繋がるのかを考察し、最後にこの作品における作者の意図を述べたい。

I

アンソンが愛する唯一の女性は一ポラである。この小説は彼がエール大学を卒業する22才の頃から30才までの期間を実際に扱っているが、彼が22才の頃恋愛する一ポラは、彼が30才の時彼女が産褥で死ぬまで彼の意識を去らない女性である。小説全体に描かれているアンソン特有の心の動き方の基本は彼女との恋愛における彼の心の動き方に要約されている。そこで初めてこの恋愛を考察していきたい。

一ポラは “a conservative and rather proper girl” “her primness” “sincerity” (この “sincerity” は引用符付きの “sincerity” で「きまじめさ」の意味で使われている) という形容が示しているように、ヴィクトリア朝モラルを持った女性である。

2人の周りの風潮は享楽を是認するものである。それは恋愛する2人が「茶化」されるという言葉で示される。

Often it was interrupted, giving way to that emasculated humor we call fun...

(p. 180)^③ ①

或いは次のようにも書かれている。

They came to resent any interruptions of it, to be unresponsive to facetiousness about life even to the mild cynicism of their contemporaries. (p. 180)

..... ②

①の引用の “that emasculated humor we call fun”, ②の引用の “facetiousness about life” や “mild cynicism” の表現は人生に意義を見い出せず享楽に走る風潮を示している。雑誌版では②の引用の文章は次のようになっている。

They came to resent any interruptions of it, to be unresponsive to facetiousness about life, even to the mild cynicism of their contemporaries with which they had recently agreed. ⁽⁴⁾

すなわち、ポーラも享樂の文化の洗礼を受けている。作者が本の形にする際、“with which they had recently agreed”というフレーズを省略したのは understatement の手法によってポーラの性格に幅を持たせるためと思われる。彼女は「とりすました所があったにもかかわらず絶大な人気があった」(p. 179)とあるように、社会風潮に迎合することなく、彼女の存在価値を社会に認めさせていく精神的な力を持っている。アンソンが彼女にひかれるのは、彼女の生き方に緊張を持続する精神力を認めたからである。

確かにこの恋愛は最初は雰囲気酔っているだけの性質のもので、アンソンは彼女の単純さに軽蔑を覚え、その恋愛の雰囲気に没頭することはできない。しかし、彼は次のような愛の神秘的な深まりを経験する。

… but with his love her nature deepened and blossomed, and he could despise it no longer. (p. 180)

更に、堅いモラルの持ち主の彼女は「陽気で、好色的で、快楽に絶倫な食欲ぶり」を示す彼に「熱狂的な神聖なまでの激しさ」(a rapt holy intensity)で反応する。

W. B. Stein は、この“a rapt holy intensity”はナレーターの感情移入が過ぎた表現であると解釈している⁽⁵⁾しかし、彼女と別れた後もアンソンが彼女に執着するのは、ポーラとの恋愛で彼にとってある稀有の経験をしたためと見なした方が妥当と思われる。このように考えれば、好色的なアンソンに「彼女は熱狂的な神聖なまでの激しきで応じた」という表現は、彼が彼女との恋愛の現実を「熱狂的な神聖なまでの激しさ」で感じるという体験をしたことを示していると解釈できる。

それでは、アンソンがこのようにポーラとの恋愛に神聖さを感じることは、彼のどのような内面を表わしているのでしょうか。高橋康成氏は『エクスタシーの系譜』の中で「日常生活における聖なるもの」の心理的特徴を紹介している。

ミシェル、レイリスは「日常生活における聖なるもの」についてこう書いている
— それは「畏怖と執着の混合、誘惑的で同時に危険でふしぎに魅力的で同時に近づきがたいものによって喚起される両義的態度、尊敬と欲望と恐怖の混ぜもの」を心理的特徴とする、と。⁽⁶⁾

アンソンは大富豪の長男であり、日常生活において、金が可能にする自由と特権を満喫する経験を幼少から重ねてきた人物である。彼はそのため、自分の世界も他人の世界も完全に理解していると思っている所があり、世の中は自分の意のままに動くと思っている。しかし、逆に言えば、彼はそのため日常生活で畏怖の念を喚起されることはない。

前述のように、ポーラは享樂の風潮に迎合することなく、社会に対して彼女の存在価値を証明している緊張した精神である。アンソンはそのような彼女の稀有な存在価値を認め尊敬していると言える。彼は享樂の嗜好癖を持っているが、彼女のヴィクトリア朝モラルはそれを禁止するので、彼女に対して恐怖感もある。アンソンは、ミシェル・レイリスが指摘する心理的特

徴、「尊敬と欲望と恐怖」の混合を持っている。いうまでもなく、欲望が彼の心理に含まれているのは、ポーラが女性であるからである。

彼がポーラとの恋愛において「尊敬と欲望と恐怖」の混合を喚起されるのは、彼が彼女を精神の *vitality* という価値規準で捉えているためである。また、彼女を精神の価値規準で捉えることは、彼が彼自身を精神の価値規準で捉えることでもある。このように自己を精神の価値規準で捉える時、現実には彼に強く豊かに訴えてくる。小説が進むにつれて彼が失ったと感じるのは、この強度の現実感覚である。

フィッツジェラルドの作品において、人間を精神の *vitality* の価値規準で捉える代表的人物は、*Gatsby* と *Dick Diver* である。彼らは自己を1個の精神として捉え、周囲の者と分かち合えない自己を発見する時、孤独に自己の精神を追求していく人物である。この精神の特徴はきびしい自己凝視と自他を区別する知性にある。*Gatsby* は *Daisy* に感傷的な愛を5年間持ち続けるが、「彼女の声にはお金がつまっている」という言葉で、*L. Trilling* の言う「知的大胆さ」⁷を示し、*Daisy* が彼女の夫を愛していることを認めなければならなくなった時に、「とにかく、それは個人的な問題に過ぎない」と言って、彼女の不実を糾弾するという倫理的判断をする自己を超越している。*Dick Diver* はくずれていく途中で、自己、他者特にヴォレン家を検閲し、一元的な世界にくみこまれていくことに反抗を示す。彼の飲酒は、一元的な世界で個人の尊厳を保てなくなった者の自己暴露であり、*A. Mizener* の指摘する通り、一元的な世界への「抗議」である⁸。

作者は *Gatsby* と *Dick Diver* の特質—自己凝視と自他を区別する知性—をある程度ポーラに与えている。しかし、アンソンには、この特質はない。以下、この特質の欠如のため、恋愛の初期の強度の現実感覚が弱まっていく様子を追ってみたい。

アンソンの心理は、彼女が金持ちの娘であることを知ったところで変化をする。雑誌版と現行の小説を比較すると、彼女が金持ちの娘であることを打明けるくだりに変化がある。

The next day Paula told him that she was rich, that she had a personal fortune of nearly a million dollars. (p. 180) …… ①

The next day Paula told him the interesting fact that she was rich — she had a personal fortune of nearly a million dollars. ⁽⁹⁾ …… ②

①は現行の小説から、②は雑誌版からの引用である。作者は本の形にする際に、“the interesting fact” という語句を省いている。この省略にも前述の省略と同様に、アンソンの心の動きを明らかに表わさずに何気なく書くことでより効果を出そうとする作者の意図が考えられる。

ともあれ、ポーラが金持ちの娘である事を知った所でアンソンの心理に変化が起きる。ポーラと彼女の母親はアンソンの家があるニューヨークについて来る。アンソンは彼の叔父が開くパーティに出向く途中、酩酊して彼女の滞在するホテルに立ち寄る。その時の彼の心理は次のようである。

… he was both amused and sorry. (p. 181) …… ①

また、その後のパーティの会場における彼の失態は次のように描かれる。

He talked boisterously and somewhat offensively to the party at large for fifteen minutes, and then slid silently under the table; like a man in an old print — but, unlike an old print, it was rather horrible without being at all quaint.

(p. 182) …… ②

①の引用で「すまなくもあった」とあるのは、酩酊が彼女の母親に知れて、彼女と結婚できなくなることを彼が意識しているからであり、この意識は彼がポーラを vital な精神を持つ個人として愛していることを示している。しかし、「おかしくもあり」という反応は明らかに、人間をそのように精神の vitality の価値規準で捉えることへの冷笑がある。アンソンの心理の中に、人間を富の量で判断する価値規準が忍びこんで来たのである。すなわち彼は自己を vital な精神としてではなく、富豪ハンター家の一員として捉えつつある。②の引用での彼の行動は、自己を富の量で判断する意識が自己を vital な精神として捉える意識を圧倒し、富豪ハンター家の一員としての自己のイメージが彼の意識の全面を蔽った姿である。パーティへ行く途中車の中で淫らな歌を歌う友達を禁止しないアンソンに対して、ポーラのヴィクトリア朝モラルは拒否反応を示す。自己を富の価値規準で捉える時喚起される富豪としてのプライドと優越感を持っているアンソンにとってこれは屈辱である。しかし、彼女の vital な精神も反面意識されるので、彼は彼女を攻撃することはできない。そのためその攻撃性は彼女にではなく、パーティの参加者に向けられる。②の引用におけるアンソンの失態は、以上のような心理の屈折によっている。

この時点ではアンソンはポーラを精神の価値規準で個人として評価し捉えている。しかし彼の泥酔が彼女の母に知れ彼女の母と会談する時、彼はポーラを vital な精神としての個人として捉えることができなくなる。

The next afternoon Anson had a long talk with Mrs. Legendre while Paula sat listening in silence. It was agreed that Paula was to brood over the incident for a proper period and then, if mother and daughter thought it best, they would follow Anson to Pensacola. On his part he apologized with sincerity and dignity — that was all; with every card in her hand Mrs. Legendre was unable to establish any advantage over him. He made no promises, showed no humility, only delivered a few serious comments on life which brought him off with rather a moral superiority at the end. (p. 183)

ここで“with sincerity”, “a few serious comments”, “a moral superiority” という言葉には、アイロニーがこめられている。彼にとって真の内面の問題は、ポーラを精神の vitality の価値規準で捉える意識に、彼女を富の量で判断する規準が介入し、彼の意識を分裂させることを認識することであり、この問題を直視し葛藤する姿勢にしか、真の意味での「誠実と威厳」も「まじめな意見」も「道徳的優越性」もない。しかし、この時のアンソンには上のような認識に到るべく葛藤する想像力は皆無であるから、ナレーターは皮肉っているのである。

アンソンが、彼女の面前で富の量の価値規準によって自己を捉えレジャンドル家を支配する行動をとることは、ポーラを vital な精神としての個人として捉えていないことを表わす。彼はこの行動において、彼女への強い愛情が彼女を富の量の価値規準で捉える時に喚起される蔑視によって亀裂を生じるのを感じ取る。なぜなら、富の量の価値規準で彼女を考える場合、彼

女の遺産と彼の遺産には雲泥の差があるからである。注意すべき事は、一部始終を「ポーラが黙って聞いて」いることである。彼女はアンソンの人間性を疑い出し、彼女の愛も亀裂を生じる。

Then, with every opportunity given back to them, with no material obstacle to overcome, the secret weavings of their temperaments came between them, drying up their kisses and their tears, making their voices less loud to one another, muffling the intimate chatter of their hearts until the old communication was only possible by letters, from far away. (p. 184)

このように亀裂を生じ弱まった彼女への愛情を彼はどのように回復していくのだろうか。パームビーチに彼女を訪ねる時の自然描写の中に、作者はアンソンの気持ちを象徴的に描いている。

Palm Beach sprawled plump and opulent between the sparkling sapphire of Lake Worth, flawed here and there by house-boats at anchor, and the great turquoise bar of the Atlantic Ocean. The huge bulks of the Breakers and the Royal Poinciana rose as twin paunches from the bright level of the sand, and around them clustered the Dancing Glade, Bradley's House of Chance, and a dozen modistes and milliners with goods at triple prices from New York. Upon the trellised veranda of the Breakers two hundred women stepped left, wheeled, and slid in that then celebrated calisthenic known as the double-shuffle, while in half-time to the music two thousand bracelets clicked up and down on two hundred arms. (p. 185)

最初の文章は、アンソンの意識の中のポーラのイメージである。「サファイヤのようなワース湖」は彼女の若々しい魅力を、「大きなトルコ石のカウンターのように延びている大西洋」は彼女の堅いヴィクトリア朝モラルを表わしていると思われるが、「長々とふくよかな豊満な姿態を横たえて」いるパームビーチは、彼が彼女を母性のイメージとして捉えている事を表わしている。そして彼女の母性のイメージは、引用の最後の箇所の彼女以外の女性達 — 金属の腕輪を鳴らしながら、プロポーションを良くし外面的魅力を増すために美容体操に励む女性達 — のイメージと対照されて、彼がポーラ以外の女性を愛することができないことを表わしている。

ここで彼がポーラを母性のイメージで捉えていることは、彼のどのような心の動きを表わしているのだろうか。アンソンの無意識の中で富と母は分かちがたく結びついている。このことは、彼の母の死去の際に「それ（母の死去）は、彼ら（ハンター家の6人の子供）から何かしら真底から実質的なものを奪い去った」（p. 199）という描写から察することができる。すなわち、ポーラを母性のイメージで捉えていることは、富の規準で彼女を捉えていることを意味する。ポーラへの愛の亀裂の実体が、彼女を vital な精神として捉える彼の意識に、富の価値規準で彼女を捉える意識が介入して、彼のポーラに対する意識を分裂させていることだということを認識しないため、彼は、その亀裂を富の価値規準によって解決しようとしているのである。

アンソンにとって、ポーラは、彼の感覚の中で富と分かちがたく結びついている彼の母親に限りなく似てくる。すなわち彼女に対する他者意識は薄らぐ。作者は次の様に書いている。

It seemed to Anson that her kind, serious face was and tired … (p. 186)

He had forgotten that Paula too was worn away inside with the strain of three years. (p. 187)

ポーラは、彼への愛情に亀裂が生じたのを見据え、亀裂をなくすべく精神の葛藤を繰り返して、不安のうちに彼の求婚を3年間待った。彼が彼女の表情に表現されている彼女の悲哀と心の欲求をなかば意識しながらも忘れるということは、彼女に対する他者意識が希薄になっていることを表わす。彼女が、Lowell Thayer という男性と婚約した時の描写, “What he never really believed could happen had happend at last.” (p. 187) は、ポーラを初めて他者として意識したアンソンの驚きを表わしている。結局アンソンがポーラを母性のイメージで捉えるということは、自他の区別を意識から排除しようとする彼の心の傾向に表わされているように、彼と彼女の存在を富の価値規準に従って一元的な存在に還元化することによって、彼女への愛情の亀裂を解決しようとする彼の内面の試みを表わしていると言えよう。

彼はドーリーとの関係でも同様に、彼女の熱情の価値を意識せず、彼女を成り上がり者の娘として富の価値規準で一元的に捉える。更に叔母エドナの浮気を処理する場合も、「彼女の移ろいかけた美を繋ぎ止めている毛皮や宝石、高価な煌びやかなもの」(p. 196) とあるように、彼女の本質に不可欠なものは、毛皮や宝石や高価な煌びやかなものだと彼女を富の価値規準で一元的に捉える。浮気の相手 Cary Sloan も同様に、彼の父に浮気が知れたら Sloan が金銭的なさし止めをくうことは必然であるとして、スローンにとって不可欠のものは金銭であるとアンソンは考えている。すなわちスローンも富の価値規準で一元的に捉える。

II

フィッツジェラルドは *The Note-Books* の中で次のように書いている。

The luxuriance of your emotions under the strict discipline which you habitually impose on them, makes that tensivity in you that is the secret of all charm — when you let that balance become disturbed, don't you become just another victim of self-indulgence? — breaking down the solid things around you and, moreover, making your-self terribly vulnerable?⁽¹⁰⁾

放縦を避けて、感情を明晰な意識で保持することによって、人は自己を保存することができる、と、作者は言っている。ポーラはアンソンに対する愛情の亀裂を直視し続けた。換言すれば、精神の問題を精神の規準で捉え続けた。その内面が彼女の「青白くやつれた」顔の表情に示されていたのであるが、亀裂を直視する精神性のため彼女は豊かな感情を覚えていると言える。彼女は豊かな感情を所有するため自己の存在感を持つことができ、アンソンとの関係が終わっても、更に初婚が失敗に終わっても自己保存することができ、再婚において他者との真の関係を確立できる。

アンソンは人生に対して積極性を持っている。“… his strong instinct for life had turned him in his twenties from the hollow obsequies of that abortive leisure class.” (p. 200) とあるように、彼は人生を生々とした豊かなものにしようと志向している。しかし、彼はポーラ

への愛情の亀裂の解決の仕方で見たとように、精神の問題を精神の規準で意識し続ける力、フィッツジェラルドの表現を借りれば、“the strict discipline”を持たない。彼は豊かな感情を覚えない。彼がポーラを失うのは、R. スクラーが言うように「彼女を自分のものにしようとする意志力が弱いから」ではなくて、¹⁰⁰パイパーの解釈のように「彼が他者に完全に自己を委ねることができないから」である。¹⁰¹そして、「彼が他者に完全に自己を委ねることができない」のは、彼を「他者に完全に委ねる」行動に駆り立てる内発的な感情を彼が自己の中に覚えないからである。

上述の *The Note-Books* の中で、フィッツジェラルドは我儘を続けると自己の確かなものを毀し、自己を脆くしていくと述べている。アンソンは何を毀し、どのような意味で脆くなるのだろうか。それはドーリーとの関係と叔母エドナの浮気の処理の際の彼の心理の歪みをみることで明らかになる。

アンソンはドーリーを愛せないと分かって彼女と別れようとする所までは正常な心理の動きを見せる。彼女との関係が一変する分岐点は、アンソンが彼女を愛せないと言うと、彼女が彼の愛を得るためおとりの手紙を出す時の彼の反応にある。

Like most compromises, it had neither force nor vitality but only a timorous despair.

Suddenly he was angry.

.....

.....

He was not jealous —— she meant nothing to him —— but at her pathetic ruse everything stubborn and self-indulgent in him came to the surface. It was a presumption from a mental inferior and it could not be overlooked. If she wanted to know to whom she belonged she would see. (p. 191)

彼は、ドーリーは成り上がり者の娘であり、自分はいれっきとした上流階級であるという意識で彼女も彼自身も一元的に捉えている。彼自身を富豪で上流階級の人間として捉える時、「彼はポーラが彼を冷淡に捨てたと思った」(p. 188)とあるように、ポーラを失った真の理由、彼の内発的な愛情の欠如を歪めて意識している。上の引用で、成り上がり者の娘ドーリーの絶望など取るに足らないと彼が判断するのは、ポーラを失った時彼が味わった絶望感と比較してのことであるが、彼の判断は真実に根ざしたものではなく、真実を歪めてみた感傷に基づいている。「突然腹が立って来た」という彼の反応は怒りの感情という強い性質のものではなく、弱い感傷的な自己憐憫である。自己憐憫は真実に基づいていないのであるから、この時彼は自己幻想によって行動している。

しかし、ドーリーは熱情を持った女性である。彼女は10才の時から以来恋愛を重ねて来た。その中に失恋もあるのであるが、「気を引くことのできなかった連中に彼女は一番心を引かれた」(p. 189)とあるように、愛への熱情を失っていない。先に書いたように、彼は生命感に溢れた人生を志向するから、彼に注がれる彼女の愛の熱情の価値を否定できない。彼は自己幻想によって行動し、彼女との関係が終わって幻想から醒める時、彼女の愛の熱情に比べ彼を行動に駆り立てた感傷がいかに弱く生命感の喜びを喚起しないものであるかを感覚する。彼がポーラとの恋愛の初期に持っていたと記憶する愛の熱情をやはり自分が持たないことを感覚する。他方、ドーリーとの関係では自己幻想に基づいて行動したのであるから、彼には、彼女の心を弄んだという自責は起きない。彼は心の喜びも自責も感じない自分の空虚な心の内を見るのである。

At first he felt that it was funny, and had an inclination to laugh when he thought of it. Later it depressed him —— it made him feel old. (p. 194)

ドーリーとの関係で希薄になったアンソンの生の感覚は、彼が叔母エドナの浮気事件に干渉することによって希薄化を増す。この時も、ドーリーとの関係の時と同じく彼は感傷による自己幻想によって行動する。

Something of his old feeling for his uncle came back to him, a feeling that was more than personal, a reversion toward that family solidarity on which he had based his pride. (p. 195) …… ①

“…… Uncle Robert has always been my best friend.” He was tremendously moved. He felt a real distress about his uncle, about his three young cousins. (p. 196) …… ②

By being silent, by being impervious, by returning constantly to his main weapon, which was his own true emotion, he bullied her into frantic despair as the luncheon hour slipped away. (p. 196) …… ③

①の引用は叔母の浮気を初めて知る時の彼の反応である。②と③の引用は叔母を呼び出して非難する時の彼の内面の描写である。②での「彼は叔父と若い3人のいとこ達のことが真から心配になってきた」というアンソンの気持ちは、①の「叔父に抱いていた昔の感情」、すなわち、ハンター家を守るという団結心が感傷化されただけのことで、①と②は同じ種類の彼の“feeling”である。しかし③の引用では、叔母を冷酷にいじめ抜く時の「彼の主要な武器」は“his own true emotion”と書かれている。“feeling”と“emotion”は違う種類のものである。③の引用で、叔母を冷酷にいじめ抜く行動に彼を駆り立てている“emotion”とは何であるだろうか。W. B. Steinは、この時のアンソンの“emotion”はドーリーのそれであると言う。Steinは次のように書く。

…… under the spell of his memory of Dolly’s adulation, her “true emotion”, (Anson) brutalizes his aunt Edna for having the kind of affair he cannot consummate … (13)

Steinの指摘通り、アンソンは彼自身がドーリーとの間に成就できなかった愛の熱情による関係(エドナとスローンの関係の場合、「若さと力」に基づいた関係と示唆されているが「若さと力」は「熱情」と同じものである。)を叔母が成就しているから彼女をいじめる。彼の感情は悪意に近い嫉妬なのである。しかし、この時彼はドーリーが彼に寄せた熱情を自己の中に仮想しているのである。彼はドーリーになりきっている。従って、叔母とスローンの熱情に基づく関係がスローンの自殺で終わり彼が幻想から醒める時、彼は自責を覚えない。他方、彼は幻想から覚醒する時、叔母とスローンの関係の「若さと力」を価値あるものと意識する。同時に、彼は叔母の浮気を知った時の初期の彼の反応を思い出す。彼はハンター家の一員としてのプライドと責任感から行動したと自覚する。そして「若さと力」という価値を毀したことを知って、

彼はハンター家の一員として彼が持つポジティブなプライドと責任感を無力なものと感じるのである。

このようにして、彼にとって確かなもの、つまり、富豪としてのプライドと責任感は形骸化する。しかし、彼が根本的に毀すものは、それらが依拠している自己意識である。経験を通して、彼は自己意識への懷疑によって内部崩壊するのである。

自己懷疑のため、彼は現在の現実には自己を commit できない。彼と世界を繋ぐものは記憶の中のポーラだけである。しかし、彼女は、アンソンとの恋愛では彼女は「のぼせ上っていた」だけだと言う。彼は心の中に生きている唯一の過去の世界も失なう。彼は自己の内部の空虚さを見つづ、自己と世界を繋ぐものを見い出せなくて、神経衰弱に陥いる。

今まで“The Rich Boy”におけるアンソンの心の動きを考察してきたが、彼の破滅の過程は次のように要約できよう。人間を精神の vitality の価値規準で捉えようとしながら、アンソンの意識の中に人間を富の価値規準で捉えようとする傾向が忍びこみ、彼の意識を分裂させる。その分裂を解決しようとして、彼は意識せず、自他共に富の価値規準で一元的に捉え幻想の世界に没頭する。そして幻想から醒めた時、自己の大事なものを毀し、自己の無力感を抱くに至る。

しかし、アンソンはなぜいとも易易と彼と異った人間 — ポーラやドーリー — の性格に自己を仮想することができるのだろうか。この態度には、自己と他者が取り換え可能であるという彼の暗黙の了解があるが、彼のこのような了解は何に根ざしているのだろうか。それを調べるためには、ポーラとの恋愛、ドーリーとの関係、叔母エドナの浮気処理に際して、彼が見せるところの富豪としての優越性の性質を考えなければならない。彼の優越性の出現は次のように描かれている。

Anson's first sense of his superiority came to him when he realized the half-grudging American deference that was paid to him in the Connecticut village. The parents of the boys he played with always inquired after his father and mother, and were vaguely excited when their own children were asked to the Hunters' house. (p. 178)

彼の優越性は、流動的社会における彼よりも下の階層の者が示す敬意というジェスチャーによって支えられた他律性の性質のものである。既に述べた3つの経験で、彼が自己を富豪として捉え優越性を享受する時、彼の精神の自律性志向は弱まるのである。だから、彼は自己をポーラとドーリーの性格に易易と仮想することができるのである。

作者はアンソンの生の感覚が幻想と覚醒によって希薄化していく様を描くことによって、富の享受が精神に及ぼすネガティブな作用 — 個人の意識において、精神の自律性を剥奪するように働く作用 — を描いたのである。

注

- (1) Higgins, John A., *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Stories*, St. John's University Press, p. 91
- (2) Stein, W. B., "Two Notes on 'The Rich Boy'", *Fitzgerald Newsletter* No. 14, p. 60
- (3) Fitzgerald, F. Scott, "The Rich Boy" in *The Stories of F. Scott Fitzgerald* (ed.)
Malcolm Cowley, Charles Scribner's Sons, 1951. 小説からの引用はこの版によった。
- (4) Fitzgerald, F. Scott, "The Rich Boy", *Red Book*, January, 1926, p. 30
- (5) Stein, W. B., "The Rich Boy's Romantic Biographer," *Fitzgerald Newsletter* No. 14, p. 60
- (6) 高橋康也, 『エクスタシーの系譜』 あぼろん社, 207頁
- (7) Trilling, L., *The Liberal Imagination*, Charles Scribner's Sons, 1950, p. 252
- (8) Mizener, A., *The Far Side of Paradise*, Vintage Books, 1959, p. 272
- (9) Fitzgerald F. Scott, "The Rich Boy", *Red Book*, January, 1926, p. 30
- (10) Fitzgerald F. Scott, *The Crack-Up*, (ed.) E. Wilson, New Directions, 1964, p. 209
- (11) Sklar, R., *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoön*, Oxford Univ. Press, 1967, p. 212
- (12) Piper, H. D., *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait*, Southern Illinois Univ. Press, 1965, p. 159
- (13) Stein, W. B., "Two Notes on 'The Rich Boy'", *op. cit.*, p. 59